

学位論文題名

自己教育の論理

—主体形成の時代に—

学位論文内容の要旨

本論文の課題は、現代自己教育の原論的・本質論的・実践論的分析の枠組みを提起し、それらをふまえて現段階の代表的社会教育実践における自己教育過程を説明するところにある。

このような課題設定の意義は序章において明らかにされる。すなわち、生涯学習時代といわれる今日、「社会教育の終焉」すら叫ばれているが、むしろ歴史的な大転換期とみられる現代こそ、地域住民がその実際生活に即して主体形成をめざす、本来の社会教育が求められていることを指摘して、そうした課題に応える「主体形成の社会教育学」を提起し、その体系的展開の方向を示す。それは、これまでの生涯教育・生涯学習論や社会教育論においては、「歴史的範疇」としての学習主体＝人格の理解が具体化されていないために、社会教育における諸形態の歴史的・構造的把握ができていないこと、国家論と社会的陶冶論が欠如しているために社会教育制度の本質論的検討が不十分であること、現段階における人格の自己疎外、とくに「意識における自己疎外」が把握されていないため、それらを克服していく自己教育過程が理論的・実証的に展開できていないことなどを念頭において提起されたものである。

「主体形成の社会教育学」は相互に関連する3つの論理レベルにおいて構成される。すなわち、結論的にいうならば、「近代的人格がその自己疎外を克服して主体形成をとげる際に不可欠となる自己教育の展開論理と、そこから必然的に生まれるてくる社会教育の基本形態を説明する」ことを課題とする「原論」と、「現代的人格の自己疎外とそれにともなう社会的陶冶過程を基盤に、自己教育活動と社会教育制度が分離・対立し、矛盾関係として展開していく構造を明らかにする」ことを課題とする「本質論」、そして「地域住民がみずからの意識変革の過程、すなわち意識化、自己意識化、それらの実践的統一としての理性の形成をとおして自己教育主体となる過程と、それを援助し組織化する社会教育労働との相互規定的な展開論理を説明する」ことを課題とする「実践論」である。この実践論には、相対的に独自の領域として「社会教育実践を総括し、未来にむけて再編成していく社会教育の計画化の展開過程」を明らかにする「計画論」を含む。

以上のような理論的枠組みのもと、「現代自己教育の論理と構造」を説明したのが第一章である。本論文で新しく提起していることは、①人格を「実体としての人格」と「本質としての人格」および「主体としての人格」の統一として把握し、人格における主体形成を「自己実現と相互承認の意識的編成である」と規定したこと、②現代的人格の自己疎外

は、「生活のあらゆる領域に商品・貨幣関係が浸透すること」によって生まれてきているが、それは商品が物象から物、さらに物神となっていく「物象化」にともない、「意識における自己疎外」が主体から理性、自己意識、意識、無意識・虚偽意識と展開することによって生じてくるものであること、③自己教育とそれを援助・組織化する社会教育労働の諸形態は、この「意識における自己疎外」を克服しようとするところに必然的に生まれてくるものであり、したがって、④自己教育過程は、自己疎外の逆コースをたどり、意識化、自己意識化、および理性の形成をとおした主体形成の過程として理解されること、などである。これらはそれぞれ、従来諸理論の批判的検討と、「主体形成の社会教育学」の体系的展開をみとおすすめで提起されている。

第二および第三章は、これらをふまえて代表的社会教育実践における自己教育過程を分析することにあてられている。

第二章では、意識化・自己意識化をめざす社会教育実践の典型例として、長野県松川町における健康学習がとりあげられる。それは、健康問題は学習者にとって普遍的・個性的・自己性的・実践的性格をもつからであり、それを学習内容の中心に位置づけた松下元社会教育主事が、健康学習を現代的人格の自己疎外克服過程、とくに認識と価値意識の統一として理解される「意識」における自己疎外の克服過程として位置づけていたと理解されるからである。

松下元社会教育主事の実践における自己教育過程は、大きく意識化と自己意識化の二つの過程に分けられ、前者においては、認識における無意識から、感覚、知覚、悟性と、価値意識における学習の必要から、関心、要求、課題の相互規定的展開過程として、後者においては、認識における直接的自己意識から、自立的自己意識、普遍的自己意識と、価値意識における欲求から価値、目的、行為（自己実現と相互承認）の相互関連における学習＝生活実践として整理されている。

第三章は、理性の形成が課題となっている代表的社会教育実践として、東京都国分寺市もとまち公民館の「農のあるまちづくり」講座をとりあげている。そこでは、これまでの理性論とくにJ.ハーバースの「コミュニケーション的理性」論の批判的検討と地域課題学習にかかわる理論的蓄積、さらにはG.W.F.ヘーゲル『精神現象学』とK.マルクスの物象化論・自己疎外論をふまえて、現段階における地域住民の素質・諸能力から、活動・労働、仕事・生産物ないし組織・制度の全体にわたって展開する、(イ)観察的理性＝個性性、(ロ)行為的理性＝活動的個人、(ハ)現実的理性＝社会的個人(協同的理性、公共的理性)という現代的理性の展開図式を提起している。

菊地滉主事によって指導された「農のあるまちづくり」講座は、「まちづくりと農業を考える懇談会」と地域づくりの実践との三重構造において展開されているが、そこに参加した住民の自己教育過程は、健康学習における意識化・自己意識化と同じ論理を背景にもちながらも、上述の現代的理性の展開過程として整理することができる。それらは、生活課題から地域課題とくに環境問題の学習への展開、イベントやボランティア活動と実習・労働学習、協同組合活動と生産学習、ゴミ問題解決への運動と提言活動、「公民館のつどい」や「まちづくりへの提言」などの活動とそれに参加した住民の意識変革過程として確認されている。

以上の整理はまた、今後の主体形成にむけた課題を提起することをも可能にしており、あわせて本論文の枠組みの学習論的意義を立証している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 山 田 定 市
副 査 教 授 高 村 泰 雄
副 査 教 授 小 出 達 夫
副 査 教 授 木 村 保 茂

学位論文題名

自己教育の論理-主体形成の時代に-

本論文は「自己教育の論理-主体形成の時代に-」と題する全文が287ページの単著論文である。本論文の中心の課題は、社会教育学の先行研究の批判的検討を基礎にして、発達教育学から主体形成の教育学としての社会教育学の体系化を現代自己教育論として提示することにある。

本論文は全体で序章を含めて4章で構成されている。

序章では、なぜ現代自己教育か、と題して、“危機の時代”としての現代社会に対応する“主体形成の時代”としての時代認識のもとに、社会教育の現代的役割と本論文の目ざす「主体形成の社会教育学」の課題を提示している。

第1章は、現代自己教育の論理と構造、と題して、現代的人格がその自己疎外を克服し主体形成をとげていく過程において必要・不可欠な実践としての自己教育の論理とその展開構造を解明している。

その際、従来の社会教育論においては社会教育についての歴史的認識が弱く、学習主体の理解が希薄であったという批判のうえに立って、その克服の理論的枠組みを、疎外論を基礎に人格論と現代社会論とを統一的に認識する立場で体系的に提示することを試みる。

この中で、その基本概念として、まず、商品所有・交換者を本質として近代市民革命によって普遍化した近代的人格を規定し、その自己疎外を克服する過程で生ずる相互教育、自己教育、社会教育労働(制度)という社会教育の基本的形態の存在と、人格・自己疎外・自己教育・主体形成という社会教育にかかわる基本概念を明らかにする。さらにこの枠組みの中で、主体形成を「自己実現と相互承認の意識的編成」と規定する。

そのうえで、現代の社会教育の解明のために、現代的人格を1970年代後半以降の日本の地域住民=賃金労働者を表象におきつつ、「生活のあらゆる側面に商品・貨幣関係が浸透し、生産物や労働のみでなく、人間そのものが商品化することが普遍化している段階における人格」と規定し、これに照応する自己教育の諸形態とその構造的関連を解明するとともに、さらに実践論・計画論への展開の道筋を明らかにする。

第2章および第3章は、第1章で展開した自己教育の論理と構造をふまえて、現代的人格の自己教育過程を実証的に研究することを課題としている。

第2章では、主として意識化・自己意識化(無意識→意識→自己意識)の過程について、長野県松川町における健康問題の学習の先進的な実践事例について解明される。ここでは優れた実践家の目からみた住民の意識変革を自己教育過程として分析することによって、意識・自己意識の形成過程で健康学習が持つ意義が明らかにされる。

続く第3章では、現段階の社会教育実践の中で、理性の形成の典型ともいえる地域づくりにかかわる自己教育過程について、東京都国分寺市の実践を事例として実証的に解明される。ここでは、もともち公民館の「農のあるまちづくり」講座を中心とする実践事例がとりあげられ、この「講座」を進めてきた専門職員・講師の実践

と「講座」参加者の意識変化の分析を通して、地域づくりにかかわる自己教育活動の社会教育実践論的意義が現代的理性の形成とその構造化にあるということが明らかにされる。

最後に社会教育実践の課題として、現代的人格(=実践論レベルでは地域住民)における主体形成、すなわち自己実現と相互承認の現実的条件を意識的・組織的に拡充し蓄積していくことが提示される。

以上の内容を骨子とする本論文は、社会教育の先行研究の批判的検討を通してその内包する問題点と解明すべき新たな課題を提示したうえで、疎外論、人格論を基礎にして、学習、自己教育と相互教育、社会教育実践、社会教育制度などの社会教育の基礎的概念について明確に規定しつつ、それらの概念にもとづいて主体形成論における社会教育学の固有の領域を設定し、独自で新たな体系的理論を提示している。

さらに、本論文は、その理論的枠組みにもとづく実証的分析を通して、社会教育実践分析の典型を示し、社会教育実践論、計画論の課題と展望を示しており、全体として教育学、とりわけ社会教育学の研究に新しい地平を切り開き、その発展に貢献する独創的論文として高く評価することができる。また、地域における実践の現代的意義の解明についても新たな枠組みを提示し、関連分野の研究にも寄与する内容を有している。

以上の本論文についての評価にもとづき、本論文提出者 鈴木敏正は博士(教育学)の学位を授与される資格があると審査員一同判断した。